



2025 年 5 月 23 日 17 時 31 分 映画

「記憶や過去を、どうやって若い世代にとって意味あるものにしていくのかを真剣に考えるべきだと思います」

長崎で生まれたイギリスのノーベル文学賞受賞作家、カズオ・イシグロさん。

原爆投下後まもない長崎を舞台にした長編小説「遠い山なみの光」に、映画として新たな命が吹き込まれました。

カンヌ映画祭での公式上映にあわせてインタビューに応じてくれたイシグロさんに、戦争の記憶が今の時代に持つ意味を聞きました。

（長崎放送局 上野暖登記者、古山彰子記者、奥瀬拓也カメラマン）

## 40 年余りの時を経て映画化

---



「遠い山なみの光」の舞台は、1952 年の長崎と 1982 年のイギリスです。

長崎で原爆を経験し、戦後イギリスに渡った**主人公・悦子**が、娘の死をきっかけに戦後まもない長崎で過ごした日々の記憶をたどり、苦悩の中から希望を見いだしていく物語です。

長崎での悦子役を広瀬すずさん、イギリスに渡ったあとの悦子役を吉田羊さんが演じています。



監督は、2023 年に第 46 回日本アカデミー賞で最優秀作品賞など 8 つの部門で最優秀賞を受賞した「ある男」を手がけた石川慶さんです。

今月 15 日のカンヌ映画祭での公式上映には、カズオ・イシグロさんも石川監督や広瀬さんらとともに会場に姿を表し、ウィットに富んだスピーチで会場を沸かせました。



出演者らと舞台あいさつに立つイシグロさん(右)

### カズオ・イシグロさん

「この映画は私が 25 歳の時に書いた本がベースになっています。**ひどい本なんです（笑）**。私  
 が書いた初めての本でして。でも**ひどい本からすばらしい映画になる**という長い歴史が映画にはあ  
 ります」

## 作品の原点「長崎」と「母」

公式上映から 2 日後、イシグロさんが NHK の単独インタビューに応じてくれました。



### カズオ・イシグロさん

「この小説は 45 年前の作品で、私にとっての最初の長編小説です。当時の私は、小説の書き  
 方すらまったくわかっていませんでしたし、フィクションもほとんど書いたことがありませんでした。この小  
 説は、熟練した経験豊富な作家の作品として読まれるべきではなく、**当時 25 歳だった 1 人の  
 若者の作品として読まれるべきだ**と思います。そういった意味で、この作品は私にとって特別で  
 す」

カズオ・イシグロさんは、1954 年、長崎市で日本人の両親のもとに生まれました。海洋学者だった父親の仕事をきっかけに、5 歳の時にイギリスに移住。成人後、イギリス国籍を取得しました。



幼少期のカズオ・イ

### シグロさん

「日の名残り」で、イギリスで最も権威のある文学賞「ブッカー賞」を受賞（1989 年）。2017 年には「偉大な感性を持った小説によって、世界とつながる幻想的な感覚のもとにある深えんを明らかにした」として、ノーベル文学賞を受賞しました。

**イシグロさんの作品に通底するテーマは「記憶と忘却」。人間や社会が生き延びるために何を記憶し、何を忘却しなければならないのかという問題を探究してきました。**



長編デビュー作となった「遠い山なみの光」の原点は、幼い頃に過ごした長崎の記憶、それに原爆が投下された時に長崎にいた母親・静子さんから受け継いだ記憶です。

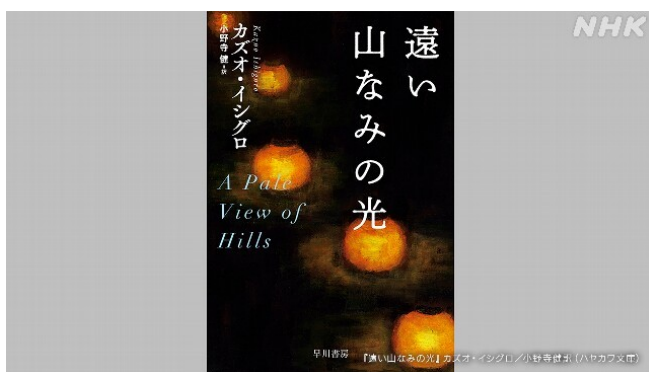
### カズオ・イシグロさん

「この本は、長崎に関する自分の感情や記憶を失わないようにするために書いたものです。私は 20 代半ばで、長崎での記憶が少しずつ薄れ始めているのを感じていました。小説の中にその世界を作り上げることで、それらの記憶を残せるのではないかと思ったのです。さらに、この作品が他

の私の作品と少し違うと感じているのは、**その背景に母との会話**があったからです。母は原爆が投下された時に長崎にいました。小説を書き始める少し前に、母がこう言ったのを覚えています。

『自分が直接体験したあの時代の記憶を、あなたに伝えておくことが大切だと思う』と。しかし、最終的に私は、小説には母の記憶を直接使わないと決めました。あまりにも個人的すぎると感じたからです。でも、母も私も、小説の土台には、私たちがその前の2年間に交わした会話があることを分かっていました」

## 母との会話から学んだ“戦争の本質”



母親から託された「あの時代」の記憶。

イシグロさんは**小さな日常の体験にこそ「戦争の本質」があると母親から学んだ**といいます。



### カズオ・イシグロさん

「私の作家としてのキャリアは、多くの点で母から聞いたことに深く関係しています。興味深いのは、それがいつも心地よい会話だったわけではない、ということです。2時間くらい一気に話して終わり、というものではありませんでした。むしろ、2年、3年という時間の中で、ある時ふとその話題が出て、母が語り始める—そういう形でした。しばしば私は『母は、本当は語りたくなかったのかもしれない』と感じていました。同時に、私自身も本当は聞きたくなかったかもしれない。でも、私たちは『話さなくてはいけない』と、どこかで思っていたのです。決してすべてが心の傷やトラウマに関する話だったわけではありません。友人たちのことや、ただ日常を生きていた人々の話もあったのです。

ごく普通の人生が、突然世界の出来事によって中断されてしまう、そういう話でした。この体験を通じて、私が学んだとても大切な教訓があります。それは、**戦争というのは映画やニュース映像で見るような巨大な出来事だけではない**ということです。むしろ、**私の母のような人々のごく日常的な体験、日々の小さなこと、時にとてもつらいこと、そういったところに戦争の本質があるのだと学びました**」

主人公の悦子を演じた広瀬すずさんと吉田羊さんは、ことばでは語られない感情を、表情やしぐさで伝えようとしたといいます。



#### 広瀬すずさん

「この辺（のど）までことばが出てきているのだけれど、それを絶対に発さない時代背景から、生きる苦しさや痛みを感じさせられると思いました。演じさせていただくからには、人それぞれの痛みというのをちゃんと認識して、少しでも悦子さんと共鳴できたらいいなと思いながらやっていました」



#### 吉田羊さん

「（登場人物が）語っていることよりも語られなかったことにこそ、真実やメッセージがあると思います。意外と戦争が遠くない、身近にあるということを感じられる今だからこそ、この映画を通して伝えることができるのではないかと思います」

## 「核攻撃とは何か」忘れ始める時代に

---



映画では、悦子が「私が被爆していたら、結婚しませんでしたか？」と夫に迫る場面など、原作にはなかった被爆者に対する差別や、心の傷などが新たに描かれました。



### 石川慶監督

「この小説が書かれた時（1980 年代）から年月がたち、その時の感覚が薄れてきている中、ある程度プッシュしないと伝わらないものになってしまっていると思います。**今の人たちが見て、（当時）どのような問題があったのかをしっかりと受け止められるようにするシーンを加えること**にしました」

イシグロさんも、新たなシーンは「核の脅威」の記憶を若い世代に受け継ぐ上で必要な描写だと考えています。

### カズオ・イシグロさん

「私がこの物語を書いた当時は、そうした出来事（被爆の描写）に少し触れるだけで、読者には十分に伝わりました。小説を書いたのは、原爆投下からまだわずか 35 年しかたっていない時期でした。特にイギリスでは、ソ連との間で再び核戦争が起こるのではないかという不安が広がっていた、非常に緊迫した時代でもありました。だからこそ、人々は放射能や核攻撃がもたらす影響についてとても敏感で、少し暗示するだけで十分だったのです。けれども、**今の若い世代にとってはそうはいきません。核爆発が何を引き起こすのか、それをもっと明確に描く必要がある**ので

す。なぜなら、冷戦が終わって以降、私たち**社会全体が『核攻撃とは何か』**を徐々に忘れ始めているからです」

「この映画は、**今の世代のための“語り直し”**なのです。私たちは、原爆投下と第2次世界大戦の終わってから80年というタイミングでこうした記憶や過去を、**どのように若い世代にとって意味あるものにしていくのか**を真剣に考えるべきだと思います。**親の世代の記憶を再構成**しなければならないのです。ホロコーストの記憶をどう伝えていくかという話でも、ヨーロッパの人たちと同じような会話をしたことがあります。実際にその出来事を体験した世代がいなくなってしまった時、どうすれば次の世代の子どもたちに関心を持ってもらえるのか。どうすれば、これは彼らの人生や、彼らがこれから築いていく世界に関わる大切な物語なのだと伝えられるのか。**世代ごとに、私たちはこうした記憶の伝え方を再考する必要があります**。ただ同じ形で記憶を繰り返すだけではいけないのです」

## 被爆 80 年 消えゆく記憶の中で...

---

時間の経過とともに薄れていく戦争の記憶。

イシグロさんが忘れてはならないと話すのは、戦争の悲惨な体験や証言だけでなく、**そこから立ち上がり、不完全ながらも平和を維持してきた人類の歩み**です。



カズオ・イシグロさん

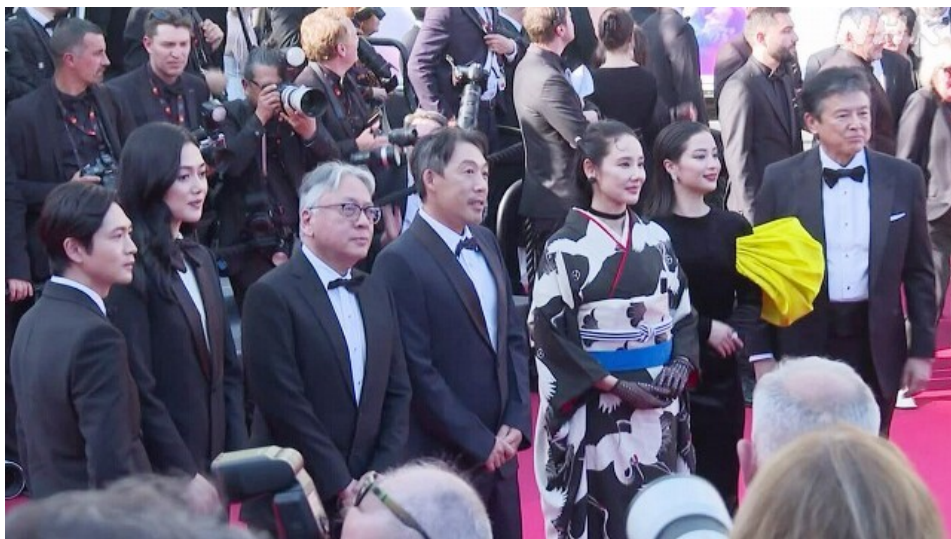
「私たちがこの80年ものあいだ大規模な戦争を避けてきたことは、ある意味で奇跡のようなものです。しかし、私はこれが偶然だとは思っていません。**国際的な努力の積み重ね**があってこそ成し得たことだと考えています。だからこそ、2025年というこの時代が、とても危険な局面にあるのではないかと感じています。第2次世界大戦の終わりに構築された多くの重要な国際機関、たとえば国際連合、そしてIMF＝国際通貨基金や世界銀行といった経済的枠組み、あるいは人

権という概念そのものです。こうした仕組みの多くは、平和を保つために非常に重要な役割を果たしてきました。しかし現在、それらの価値観や制度は、ますます疑問視されるようになっていきます」

「危惧しているのは、私たちが『なぜそれらの制度が作られたのか』ということを忘れつつあるということです。それらの制度は、私の親の世代—あなた（上野記者）にとっては曾祖父母の世代かもしれませんね—によって築かれたものです。そして、それは単なる“慈善的な理想主義”から生まれたわけではありません。彼らは本気で理解していたのです。『もう一度世界大戦が起これば、人類は滅びるだろう』と。ですから、今は本当に危険な時期なのだと思います。あまりにも長い間平和が続いたことで、多くの人々が平和とは自然で、永続的な状態だと誤って信じてしまっているのです」

## 文学や芸術がもたらす平和のための“出会い”

---



平和を維持するために世界が築いてきた仕組みがゆらぐ今、イシグロさんが望むのは、文学や映画をはじめとした芸術が、人々が対立を乗り越えて感情を共有する「出会いの場」となることです。



カズオ・イシグロさん

「**文学や映画は平和を守る助けになるでしょうか。そうであってほしいと私は思います。**しかし一方で、私は現実も理解しています。たとえば、1930年代、世界で最も映画が発展していた国のひとつはドイツでした。ドイツには偉大な映画監督たちがいましたが、ヒトラーの台頭は止められませんでした。文学でも同じです。トルストイ、ドストエフスキー、チェーホフ、ツルゲーネフ、これほどの作家たちがいたロシアでも、その後続く長い苦難の時代を止めることはできませんでした。つまり、**偉大な作家や映画監督、音楽家だけでは、平和を守ったりファシズムの台頭を止めたりすることはできないのです。**文学や芸術にそこまでの力を期待するのは、ある意味でナイーブかもしれません」

「**けれども個人のレベルでは、文学や映画は文化の壁を簡単に超えることができます。**私が初めてカンヌに来たのは今から31年前、映画祭の審査員としてでした。その時私はアッバス・キアロスタミ<アロスタミ>のジグザグ道三部作は、「友だちのうちはどこ?」「そして人生はつづく」「オリーブの林をぬけて」の3作品>というイラン人監督の映画を初めて見ました。それまで私はイランの生活について何も知りませんでした。写真さえ見たことがなかったんです。イランといえば『人質を取った悪者たち』くらいの印象しかありませんでした。でも、その映画を通してそこには人間が生きていて、いろいろな意見を持っているのだと気づきました。それ以来、私はイラン映画の大ファンになりました。一度そうした経験をすると、その国全体を悪と決めつけることや、戦争を起こすことはとても難しくなるのです」

「**宗教や社会が違って、私たちは互いに感情を共有すべき**なのです。同じ価値観を持つ必要はありません。意見が違っていてもかまわない。でも、もし世界中で同じ『ミッション:インポッシブル』を見ていたり、村上春樹さんの最新作を読んでいたたりすれば――少なくとも同じ会話ができるのです。同じ話題について議論し、異なる意見をぶつけ合うことができる。これはとても大切なことです。**私たちは皆『同じ会話』の参加者であることが重要**なのです。」

**文学、芸術、文化というものは、人々が出会い、交わるためのすばらしい場です。たとえそこで意見がぶつかり、議論になったとしても、それこそが本当の意味での『出会い』なのだと思います**」

## 運動靴と赤い金魚

### CHILDREN OF HEAVEN

監督：マジッド・マジディ

出演：ミル＝ファロク・ハシミアン、バハレ・セツデキ、アミル・ナージ、フエレシュテ・サラバンディ、ダリウシュ・モウタリ

ジャンル：ドラマ 1997年 イラン 88分

音声：ペルシア語